

## 横浜市におけるATL感染の現状

曾田研二<sup>1)</sup>, 母里啓子<sup>2)</sup>, 住吉好雄<sup>3)</sup>

### 要 約

昭和61年6月から63年9月までに横浜市の妊婦およびその夫と出生児について抗ATLA抗体を調査し、次の結果を得た。①妊婦の抗体陽性率はPA法で2.3%、IF法で1.2%であった。②抗体陽性妊婦の出身地は九州・沖縄地方が63%を占めた。③児の抗体の推移は、人工栄養児13例、母乳哺育1例につき、生後9カ月までに全例が陰性となった。④抗体陽性妊婦の夫11例のうち3例(27.3%)にIF法で陽性率がみられた。

### はじめに：

横浜市は近年、地方からの人口流入により人口が急速に増加した都市で、また住民の出身地も多様であり、生産人口割合も高い。このような人口集中型大都市における妊婦のATL感染と出生児の母児感染の状況には、伝統的<sup>1)</sup>地方都市・地域とは異なるATLの疫学像が考えられる。これらの点を考慮して、横浜市の一つの産院における妊婦と児を継続的に調査し、ATL母子感染の現状を明らかにすることを目的とした。

### 対象及び方法：

調査対象は昭和61年6月から昭和63年9月までの間に横浜市愛児センター(横浜市南区中村町)を受診した妊婦(妊娠1

6週以降) 1,624名、及び抗ATLA抗体陽性の母親から出生した児とATLA抗体陽性妊婦の夫である。対象妊婦の年齢分布は表1に示すとおりである。抗ATLA抗体のスクリーニングは粒子凝集法(PA法;セロディアATLA, 富士レビオ)により同センターで測定を行い、陽性者についてはさらに間接蛍光抗体法(IF法)により外部(SRL)で確認試験を行った。

### 結果及び考察：

#### 1. 妊婦抗ATLA抗体の検索：

妊婦 1,624名の抗ATLA抗体検索結果を表2に示す。PA法で陽性者は37例、2.3%であった。このうち確認検査(IF法)により19例、1.2%が陽性であった。IF法による抗体価は5~640倍、平均抗体価120倍を示

<sup>1)</sup>(横浜市立大学医学部公衆衛生学教室)

<sup>2)</sup>(国立公衆衛生院疫学部急性感染症室)

<sup>3)</sup>(横浜市愛児センター)

した。関東地方におけるHTLV-Iキャリアは0.7%といわれているが、我々の成績はこれより高く、また、神奈川県血液センターにおける献血者スクリーニング成績(PA法)による2.0%とほぼ同程度であった。

## 2. 抗ATLA抗体陽性妊婦の出生地

抗体陽性者の出生地を表3に示す。九州・沖縄地方出身者は12例、63%である。横浜市住民の出生地について正確な資料は持ち合わせていないが、全住民の10%以下と推定され、今回の成績から明らかな地域偏在性を認めた。

## 3. 児の抗ATLA抗体価の推移

19例の抗体陽性妊婦のうち、14例が9月末までに出産し、1例は母乳哺育を行ったが、他の13例は人工栄養によって育児を行

った。これら児の出生後18カ月までの抗体価の推移を図1に示す。全ての児は9カ月には抗体陽性(<5)となった。この他に1989年1月12日までに5例の児が出産したが、出生直後の抗体価は20~320倍である。抗体再陽性化の可能性をみるため、さらに3歳までこれらの児の抗体価の推移を追跡する予定である。

## 4. キャリア妊婦の夫について

抗ATLA抗体陽性妊婦11例について、夫の抗体価(IF法)を調べた結果を表4に示す。11組のうち3例(27.3%)の夫が抗体陽性であった。陰性率は72.7%であり、妻から夫への感染率は必ずしも高くはないと考えられる。

表1 対 象

検査期間 昭和61年6月～昭和63年9月  
 妊 婦 1624名 (妊娠16週以降)  
 年 齢 16～41歳

年齢	人数	%
10代	32	2%
20代	1030	63%
30代	547	34%
40代	15	1%
総数	1624	100%

表3

抗ATLA抗体陽性者および  
 その家族の出生地

地方	例数	陽性率
九州, 沖縄	12例	63%
そ の 他	7例	37%
(総 数)	19例)	

表2

妊婦抗ATLA抗体検査結果

	陽性数	%
PA法	37	2.3%
IF法	19	1.2%

(検査総数 1624)

抗体価 (IF法)

5～640倍(平均 120倍)

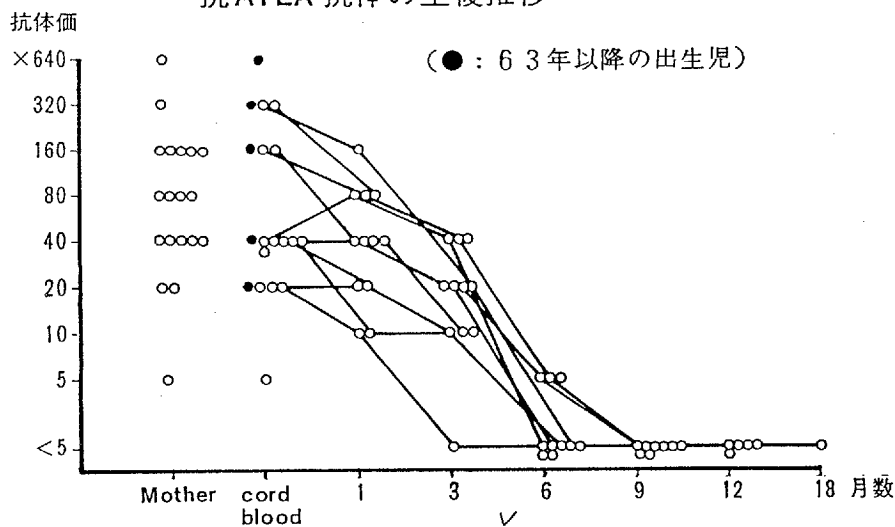
表4

HTLA-Iキャリア妊婦の  
 夫の抗ATLA抗体価

症例	妻	夫
1	80	(-)
2	40	(-)
3	80	(-)
4	20	(-)
5	80	(-)
6	160	20
7	20	40
8	160	(-)
9	40	(-)
10	160	(-)
11	40倍	320倍

検査法 (IF法)

図1 抗ATLA抗体の生後推移





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要約

昭和 61 年 6 月から 63 年 9 月までに横浜市の妊婦およびその夫と出生児について抗 ATLA 抗体を調査し、次の結果を得た。妊婦の抗体陽性率は PA 法で 2.3%, IF 法で 1.2%であった。抗体陽性妊婦の出身地は九州・沖縄地方が 63%を占めた。児の抗体の推移は、人工栄養児 13 例、母乳哺育 1 例につき、生後 9 ヶ月までに全例が陰性となった。抗体陽性妊婦の夫 11 例のうち 3 例(27.3%)に IF 法で陽性率がみられた。